
序 文

「世界仏教文化研究センター」(以下、世仏センター)は、2018(平成30)年度から基礎研究部門・国際研究部門・応用研究部門の三つの車輪がそろって走り出す。その本格的活動に向けて着実に歩みを進めている。

世仏センターでは開設2年目の事業を活動一覧に記載した通り行った。国内外から沢山の研究者を招き講演会等を行ったが、そのうち特記すべき幾つかの活動について触れておく。

1月29日に開設記念事業特別講演会としてジャーナリストで名城大学教授の池上彰氏と東洋大学長の竹村牧男氏を招き、「世界の苦悩に向き合う仏教の可能性—共に生きる道はどこに一」を主催した。本学学長の赤松徹眞氏を交えたまとめの鼎談では、浄土真宗の精神を建学の精神とする本学の社会にはたす役割が再確認された。「慈悲の心を世界に」——この講演会から発信されたメッセージである。この企画は開設初年度より計画されていたが、池上氏が取材調査するアメリカ大統領選との関係により、トランプ新大統領の就任式が行われた1月を待って実現した。事務局の吉貞正流氏の粘り強い交渉のお陰であり、開設記念事業と銘打たれているのはそのためである。また新聞報道でも大きく取り上げられ、社会の注目をあびた有意義な講演会をもつことができた。

その前週の1月22日には、明治大学野生の科学研究所所長の中沢新一氏を招き、学術講演会として「華嚴の世界—『華嚴経』と南方マンダラー」を主催した。この講演会も前年から企画されていたものであった。開催するにあたり、事前学習のための公開研究会を2回開くなど、コーディネーターの唐澤太輔博士研究員により周到に準備が整えられた。仏教と科学が南方熊楠において結びつき化学反応を起こしたところに成立する南方マンダラ、その縁起的世界観の構造解明を取り上げたもので、壇上での話にフロアの聴衆が熱心に聞き入った一体感あふれる講演会となった。

これらの講演を通して、古典にとどまらず現代の文脈においても仏教の説く「縁起」の重要性が浮彫にされた。さらに探求すべき課題であろう。

また科研費による研究と提携した事業にも取り組んだ。5月28、29日には、桂紹隆世仏センター研究フェローが代表を務める科研費助成事業「ラトナーカラシャーンティの『般若波羅蜜多論』新出梵語テキストの研究」の研究活動の一環として、国際ワークショップ「清弁と二諦」が開催されたが、世仏センターは積極的な人的助力をもって国際ワークショップの開催を支援した。

11月18日には国際シンポジウム「中央アジア出土資料のデジタルアーカイブ—その現状と課題—」を開催した。大英博物館国際敦煌プロジェクト（IDP）、古典籍デジタルアーカイブ研究センター、仏教文化研究所西域文化研究会との共催事業であるが、このシンポジウムでは、仏教とIT技術などが結びついた、龍谷大学が手がけてきた文理融合型・学際的な仏教研究のあり方が世界の先駆的位置にあることが浮彫にされた。本学の特色ある研究として今後益々世界から注目されることが予想されるし、またさらなる展開が期待される。

また今年度前期5回、後期5回、博士研究員、リサーチ・アシスタントによるRECコミュニティカレッジと提携した講座を組んだ。若手研究者の講義に多くの受講者があり、研究成果の社会還元事業にも取り組んだ。

国際研究部門の活動としては、研究成果をWeb上で発信する新たな取り組み、E-ジャーナル *Journal of World Buddhist Cultures* を試行的に発刊した。本号には英語論文1編、日本語論文1編、翻訳1編、書評2編と収録された論文本数は少ないが、次年度の本格的な刊行に向け準備を整えることができた。

また応用研究部門では、今年度よりグリーンケア公開講座をスタートし、現代世界のかかえる苦悩や悲しみに応答する実践的な仏教研究を積極的に推し進めていった。詳細は別冊の活動報告書を御覧いただきたい。

本年度、世仏センターはこのように多彩にして密度の濃い事業活動を展開してきたが、さらに充実させ歩みを確かなものにしていきたいと考えている。

2017年3月31日

センター長 能仁 正顕